
裏世界と剣と銃

雷雲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

裏世界と剣と銃

【Nコード】

N1338N

【作者名】

雷雲

【あらすじ】

夏休み、親が旅行に行つて1週間。ぼくは、毎日いじめられていた。そして、今日もいじめられていた。そして顔をけられようとした瞬間。僕がいた路地裏を光が照らした。これは青年ラルズが切り離された二つの世界を一つの世界に戻すため、二つの世界を旅する物語である。

裏世界の神との出会い

今日もラルズは家に一人でいた。だが、あの老人はやってこない。ラルズはやはり嘘かと真っ暗な景色を見渡していた。

この世界に光はない。この世界の人間は人工の光を使って世界を照らしている。だが、それはちつぽけな明かりにすぎない。雲と言う名の物もはつきりと見えていない。

ラルズがテレビを点けようとすると、後ろから人工の光ではない光が部屋を照らした。

ラルズが後ろを振り返ると、なんとあの老人がいた。

「さーて！裏世界へ行くぞ！」

（3日前）

ラルズは人工の光が届かない路地裏で倒れていた。また、いじめられていたのだ。顔にはあざができ、ラルズは泣いている。そしてその近くにいたガキ大将と思われる者が止めとして顔を蹴ろうとすると人工の光ではない光が、路地裏を照らした。ガキ大将と思われる者は怖がって逃げてしまった。そこには一人の老人がいた。

「大丈夫かい？」

「あ…はい。大丈夫です。ところであなたは？」

「ああわし？裏世界の神じゃ」

「神!？」

「しゝ。こっちの神には秘密なのじゃ」

「…………で、裏世界って？」

「こっちの世界とは違う世界じゃ。いいぞ。こっちの世界は」

「へ」

ラルズは裏世界や神のことを半信半疑で話していた。

「その裏世界の神様がどうしてここに？」

「ああ、その理由は……あっそうか……」

神は一瞬黙り込んで独り言を言った。その独り言の中に、「話してもまた記憶を消せばいい」と言う言葉が聞こえた。

「あの……」

「ああ！すまんすまん。その理由はな、こつちの世界とわしが居る世界を合体しなければいけないからじゃ」

「合体？」

「ああ。こつちの世界とわしが居る世界はもともと同じ世界なんじゃ。だが、こつちの世界が独立してこつちの世界とわしが居る世界が切り離されてしまったのじゃ。その時にこつちにいた神は死んでしまったのじゃが、こつちの世界とわしが居る世界が切り離されたままだと、世界が二つとも死んでしまうのじゃ」

「死んでしまうって？」

「簡単にいえば一瞬のうちに爆発するということじゃな」

「ええ！？」

「だから、わしはこの二つの世界を合体させてくれる者を探しとるんじゃ」

「じゃあ、あなたが自分でやればいいじゃないですか」

「わしには仕事があるんじゃ。災害を起こして生物の繁殖を止めなければならぬし、運命の女神との話し合いもある」

「なら、僕がその世界を合体させます！」

「だめじゃ、お前は小さすぎる」

「……………」

「それじゃあ記憶を消さしてもらおうでしょう」

老人は杖を取り出した。杖から光がでて、ラルズの体を貫いた。

「さて、それでは、行くでしょうか。」

老人は歩いて行った。

「まって神様！！」

老人が驚いた。

「お前！記憶が消えてないのか！」

「僕なんともなかったんだけど！」

「くっ…そんなはずは…もう一度行くぞ！」

だが老人が何度記憶を消そうとしてもラルズの記憶は消えなかった。

老人が言った。

「………仕方ない。お前に二つの世界を合体させてもらおう。準備ができればそっちに行く」

老人はどこかへ行ってしまった。

そして今。

「ねえ！神様！こっちの世界はどうなるの！ぼくはこっちの世界にいるはずだよ！」

「だいじょうぶじゃ、ダミーを作っておる。ほら！行くぞ！」

「う、うん」

ラルズは老人と共に、光の先へと向かった。

「さよなら。僕の住む世界。」

準備と訓練

ラルズは裏世界の神と、光の先へ向かった。そこは、薄暗い場所だった。どうやら建物の中にいるらしい。

「ここは？」

「倉庫じゃ。まずはここで冒険の準備をするぞ」

あたりには沢山の木箱が置かれていた。

「まず、お前は若すぎる。それではモンスターと対等に戦えないので、未来の姿にするぞ」

「え？モンスター？」

神は杖を取り出し、光でラルズの体を貫いた。

ラルズは数秒光に包まれた。そこにあった鏡で自分を映すと、そこには黒い髪に青色の瞳をした20代の男が立っていた。

「これ…本当に俺なのか？神様」

「ああ、そうじゃ」

「俺がこんな姿になるなんて想像もできないぜ。……って、口調も変わってる」

「ああ、未来の自分じゃからな。次は、武器じゃな」

神はそこにあった木箱から斧や槍や剣などを取り出した。

「さて、どれを選ぶのじゃ？」

ラルズはそこにあった剣を指差した。

「それは…ナイトソードじゃな。最も使いやすい剣と言えるじゃろう。それでいいのじゃな？」

「ああ」

「それじゃあ、次は裏世界の武器じゃな」

神は杖を取り出し、霧を作り出した。霧が晴れるとそこには沢山の銃器があった。

「俺がいる世界でも冒険をするのか？」

「ああそうじゃ。さて、どれを選ぶのじゃ？」

「それじゃあ……これかな」

ラルズが取ったのはリボルバーだった。

「スタームルガー・ブラックホークじゃな」

「…詳しいな」

「神じゃからな。それでいいのじゃな？」

「ああ。」

神は武器を一瞬にして消えさした。

「よし、これで準備は終わりじゃ。外に出よう」

「ああ。」

二人はドアを開けた。そこは、ラルズのいた世界には見ることができない「草原」と言う景色だった。

「ま、眩しい！！」

「ああ、そういえばお前は太陽と言うものを知らなかったのじゃな」

「…太陽？」

「自然の光じゃ」

「自然の光！？人工の光じゃないのか！？」

「ああ、そうじゃ」

「それに、この景色はいつたい……？」

「草原じゃ、お前がいる世界では見られない景色じゃ」

「裏世界には変わったものがあるんだな」

「こっちに来なさい」

ラルズは神について行った。二人がついたのは高台だった。

「さて、ここで、モンスターとバトルの訓練をしてもらうぞ」

「モンスター？」

「ほれ」

神が指さした先には、背が1mぐらいの赤い体をしてとげがある尻尾が生えた棍棒を持っている小人のような生き物が3匹いた。

「ゴブリンじゃ。下級モンスターなのでまだ大事には至らないじゃ

ろっ。ほら、来るぞ」

ラルズが神と話しているすきにゴブリン達はもうラルズの数m先にいた。

「usorok!!!」

ゴブリン達はわけのわからないことを言った。そして棍棒で殴りかかってきた。

ラルズはそこにあつた木の棒で攻撃を防いだ。だがほかのゴブリン達がやってくる。

「ほれ、剣を使いなさい。」

そういつて神は……ゴブリンを強烈な蹴りでふっ飛ばし、ラルズに剣を渡した。

ラルズは剣を受け取り、構えた。ラルズは剣を軽々持てたが、少年の姿では重くて持てなかっただろう。

ゴブリンが殴りかかってきた。ラルズはガキ大将達によるいじめで鍛えられた瞬発力で攻撃をかわし剣で斬った。ゴブリンは倒れ、消えてしまった。その隙にゴブリンは殴りかかり、ラルズは攻撃を受けてしまった。

「っ……」

ラルズは攻撃を受けながらもゴブリンを斬った。残ったゴブリンは「aberekanisukokuohinamasuserubad!」

と、またも意味不明な言葉を言い逃げてしまった。

「なんとか、勝ったか…」

「さて、訓練は終わりじゃ。これから、天界に行くぞ」

神は光の扉を作り出した。

「さて、来なさい」

ラルズは神と共に扉の向こうへ行った。

天界

そこは我々人間が想像していたのとは全く違う、薄暗い廃墟のような所だった。

「な……」

「ここが…天界じゃ」

ラルズは驚いていた。天界がこんな姿だったなんて。

「…はっはっは！おどろいたじゃろう！昔からこのままなのじゃ」

神は笑っていたがその笑顔はわざとらしくかった。

「……………この世界が切り離された時からこうなったのじゃ……………」

「……………」

「…さて、いくぞ」

神はひっそりと建っている小屋へ入った。ラルズもそこへ入ると、今まで小さかった小屋が嘘のように中は城の中に入ったようなところだった。なかには人がたくさんいた。

「これは、自分たちが小さくなったただけじゃよ。ほら、迷子になっても知らんぞ？」

ラルズは急ぎ足で神へついて行った。

神とラルズは一つの扉にたどりついた。

「さて、お前には合ってもらいたいものがある。武力を司る者。ダブレスじゃ」

神は扉を開けた。中には若い男がいた。

「ダブレス。この子じゃ」

「ああ。君か。なら、魔法を与えないといけませんね」

「魔法？あのゲームに出てくるあれか？」

「あんなものではありません。もっと凄いものです」

「魔法は…いわゆる…想像の力」

「想像の力？」

「はい。生き物はそれぞれ想像ができます。その力を引き出すのが魔法なのです。魔法は、目には見えない、空気中にある想像の欠片からできます。ですが、それを集めるには体力がいります」

「ふーん」

「魔法を使える人間はいません。つまり、あなただけが魔法を使えるのです」

「目からビーム！的なこともできるのか？」

「まあ…そうですね。…ですが。魔法を使うにはひとつやらなければいけないことがあります」

「へ？」

「その魔法を使うにはマジックリスタルを見つけなければいけません」

「マジックリスタル？」

「はい。それは、特定された場所にしかできない宝石なのです。それを使うことによって初めて魔法を使えることができます」

「それってどこにあるんだ？」

「ここから近くにある、光の洞窟にあります。これが地図です」

ラルズは古ぼけた地図をもらった。洞窟の入り口のようなところに×印が書いてあった。

「それじゃあ、いこうぜ」

ラルズは神を連れて行こうとした。だが、神は言った。

「わしは仕事があるのでな。一人で行ってきなさい」

「まじ？」

「……まじ。」

光の洞窟

ラルズは小屋の前で地図を見ていた。

「……………はあ……………」

地図はシミだらけでところどころ破れていた。かろうじて目的地である光の洞窟までのルートがわかる。

「さて、行くか」

ラルズはそのルートを歩いた。辺りは焼けた家や塔しかなかった。

5分歩いていると、焼け落ちた塔が道を塞いでいた。

「ほかのルートは？……………無いか」

焼けた塔を見ているその後ろに巨人が立っていた。バケモノ 巨人は持っていた棍棒を振りかざした。ラルズはそれに気付かず塔を見ていた。

巨人は棍棒でラルズを塔ごと叩き潰した。

はずだった。なんと巨人が振り下ろした棍棒は男によつて受け止められていた。男は手を振りかざした。すると、棍棒がひとりに動き、巨人を叩いたのだ。巨人はフラフラしながら倒れていた。そのことにやっと気付いたラルズはこう言った。

「……………だれ」

男は笑い言った。

「フェストだ」

男は明らかにマッチョであり、髭をそっていた。服はジーパンに白い長袖のシャツを着ていた。

ラルズは後ろを振り向き驚きながらいった。

「…これは？」

「ゴーレムだ。こいつがお前を叩き潰そうとした時、俺がお前を守ったんだぞ？感謝しろよな！」

「そりやどうも。で、なんでここに？」

「護衛さ」

「護衛？俺の？」

「光る洞窟までだけどな」

「わかった。お礼は無しな」

なんだかんだで光の洞窟についた。

「んじゃ、頑張れよ」

中は明るかった。なぜ明るいかわからなかった。

ラルズはどんどん深くまで進んだ。

そのころ……

神は急ぎ足でダブレスの所へ向かっていた。

「ダブレス！」

「ん？なんですか？」

「あの番人のことは？」

「あ……」

「く……早くフェストに知らせろ！」

ラルズは扉の前で立ち往生していた。

「これはいったい？」

地図には光の洞窟の中は何も書かれていなかったのでもここに行くのに行かないのかわからなかった。

「……なかは……明るそうだな」

ラルズは扉を開けた。中は広がった。その中心に何か置かれていた。

「紙？」

ラルズは紙を拾った。

何か書かれていた。

魔法は発想も武器にする。

「……………はあ？」

光の洞窟（後書き）

次は、謎解き？

六つの扉の謎

ラルズは周りを見た。赤、青、黄色、緑、白、黒と言う六つの扉に囲まれている。

上には丸い照明があり、そこから鎖が六つ垂れている。

その端にはボタンが付いてあり、ボタンも赤、青、黄色、緑、白、黒、と言う六つの色に分かれていた。

ラルズは目の前にあった緑の扉を開けようとした。だが開かなかった。

「やはり、同じ色のボタンを押すと扉が開くって寸法か？」

ラルズは鎖の緑色のボタンを押した。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ……

何か音がした。おそらく扉の鍵が開いたのだろう。

「よし、開いた」

ラルズは扉を開けようとした。

扉は開いた。だが、扉の先にあったのは剣と槍だった。

ジャキッ！！！！

「なっ……………」

突然剣と槍が飛び出した。ラルズは何とか避けた。

「ふう〜危うく串刺しになるとこだったぜ」

剣と槍はまた奥に行き、突然扉が閉まった。

「……………他の扉を開けよう。」

次の扉は赤色だった。ラルズは赤色のボタンを押し、扉を開けようとした。だが力を入れようとしたら扉が突然開き、ラルズは危う

くペチャンコになる所だった。扉の先は壁だった。

青、トラップ。矢が次々と飛び出してきた。

黄色、トラップ。扉が突然開き、奥は壁だった。

白、トラップ。剣や槍が飛び出してきた。

そして黒色の扉。

「ゼーゼーゼー……これが正解か……」

ラルズはかなり疲れていた。ラルズは扉を開けた。なんにも変わり
はなかった。

ラルズは先に進んだ。だが、先にはゴーレムがいた。

「なっ……ハズレ？」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

ゴーレムは殴りかかってきた。

「ハズレだ」

ズドオオオオオオオオオオオオオオオオ！！

「……危ないじゃねーかバカヤロ……！！！」

ラルズは壁に寄って避けた。

「グオオオオオオオオオオ！！」

ドンドンドンドン！！

ゴーレムは急接近してきた。以外に素早い。ラルズは剣を取り、
走った。

ラルズはゴーレムの股を通り、背中を斬る。

「あれ？効いてない？」

ゴーレムは振り返った。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

ゴーレムは棍棒を振り落とした。

「効いてないね アハハ アハハ」

ズドオオオオオオオオオオオオオン！！

ラルズは消えたその場から消えた。

ラルズは棍棒に乗っていたのだ。

「手を……斬る！斬る！斬りまくる！！」

ラルズはゴーレムの手を斬りまくった。ゴーレムもさすがに痛く、棍棒を落とした。ラルズはゴーレムの肩に飛び移った。

「頭を、斬る！斬る！斬りまくる！！」

ゴーレムは頭を手で探った。

「おい！危ないぞ！！」

「……グオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

ゴーレムは暴れた。

「落ちる！落ちるって！！…あ、落ちた。」

ヒュウウウウウウウウウウ……ドン！

「ケツにきた……よし！こうなったら！」

ラルズはゴーレムの股のところで止まった。

「カンチヨ気孔突きたああああああ！！」

ラルズはジャンプして剣を上に向けた。

グサリ……

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

ゴーレムは倒れた。

「…………まさか、こんな技で倒してしまうとはな。まあいいか。」
ゴーレムは消えてしまった。

「しかし、ここからどこにいくんだ？」

ラルズは紙の裏を見てみた。

「あ、なんか書いてる……馬鹿じゃね俺。」

一から思い出す。

紙にはそう書かれていた。

「ん？」

ラルズは一から思い出してみた。そして、あることがわかった。

「そういえば……この洞窟なんでここにだけ照明があるんだ？他の所にはなかったのに……」

ラルズはふと思った。

まさか、この部屋は照明じゃなく他の何かが照らしてるんじゃないか？

ラルズは鎖を伝って登り、照明までついた。

かぼつ。

「あ、開いた。」

六つの扉の謎（後書き）

謎解きか？これ。

マジックリスタル

「……は？」

ラルズがたどり着いたのは上に大きな紫のクリスタルがある部屋だった。奥には豪華なイスに座った鎧姿のミイラが居る。

「うげっ気持ちわり。ミイラとか無しだろ」で、これがマジックリ
スタルか」

ラルズは剣を取り出し、マジックリスタルへ飛んだ。

パキン！！

割れたのはクリスタルではなく、剣だった。

「なつ…」

「それは簡単に割れないぞ」

「つ！誰だ！！」

「いいだよ」

ラルズが振り向くと、あのミイラが立っていたのだ。

「さて、お前には私と決闘をしてもらう。勝ったらマジックリスタルを渡そう。とはいえ、お前に剣が無いのは不利だな」

ミイラは手のひらを剣に向けた。すると剣が浮き上がり、剣のか
けらが集まり、元のように戻った。

「さて、始めよう。我は神帝騎士団一番隊隊長のヴァル！！いざ勝負！！」

ヴァルは腰にあった剣を取り、走り出してきた。

「いやあああああ！ やっぱこえええええええええええええええええ！」

「ぬん！！」

ズバア！！

壁に剣で斬った跡ができた。石の破片が飛び散った。

「おまえの長所はその俊敏さのようだな」

ラルズはヴァルの後ろに立っていた。

「よし。慣れてきた。じゃ、勝負」

ラルズは後ろへ走った。

「逃がさん！！」

ヴァルは剣で床を斬り、そうしてできた石の欠片をラルズに飛ばした。

ズダダダダダン！！

「まるでマシンガンじゃねえか！！」

ラルズは石を剣を振り回して弾いた。だが、弾き切れなかった一つの石が腹に強打する。

「ぐほっ！！」

ラルズは思わず手を付いてしまった。それを見てミイラが走ってきた。

「そこだ！！」

「くっ！！」

ミイラは剣を縦に振りおろした。ラルズは腹を抑えながらもジャンプして避けた。

「勝負あり」

ミイラは右の足の膝を突き上げていた。

「っ！しまっ

」

ズドオオオン！！

ラルズは蹴りを喰らって吹っ飛び、壁にめり込んだ。

「ぐっ……………」

「逃げるなら今のうちだ。」

その時、ラルズが通ったマンホールの蓋が開いた。

「ヴァル！！戦いをやめろ！！」

でてきたのはフェストだった。

「なんでお前が！？」

「ヴァル！そいつはこの世界と裏世界を再び繋ぐやつなんだ！」

「そ、そうなのか？」

「だから戦いはやめろ！！」

「……………やだね。」

「なんだって！？」

「俺はこいつと戦いたくなかったんだ。悪いな」

ラルズは床に足をつけた。

「第二ラウンドだ！！ヴァル！！」

「よくいった！！」

ラルズは走り出した。ぐんぐんスピードが速くなっていく。

「うおおおおおおおお！！」

ラルズはヴァルに急接近した。

「甘い！」

ヴァルは剣を横に振った。ラルズはその攻撃を避けた。

「上か！！」

ラルズがよける手段と言えばジャンプしかない。そうヴァルは思っていた。だが、違った。

「残念だったな！横だ！！」

ラルズは壁を走っていたのだ。ラルズは床に足をついた。

ズバアア！！

そして、回転斬りでヴァルの背中を斬った。

ドタツ…

「なっ…神帝騎士団で一番強いヴァルを倒すとは…」

「やっと倒せた…って、あれ？」

むくつ。

「私は不死身だからな。なんにも痛くないのだよ。よし、ラルズと言ったな」

「はい」

「お前にマジックリスタルを授けよう」

ヴァルは手を上に向けた。すると、マジックリスタルが少し割れ、破片が出てきた。破片はヴァルの手のひらに収まった。

「手を貸しなさい」

ラルズはそれに従い、手の平を向けた。

「むん！！」

するとクリスタルがラルズの手の平で溶けた。

「よし、これで魔法が使えるようになったぞ。ここは想像の欠片がかなり漂っている。何か想像してみるんだ」

ラルズは頭の中で炎を想像してみた。すると手の平から炎が出てきた。炎は辺りを眩しく照らした。

「それが魔法だ。何度も使ってくると疲れてくるので注意しろよ。では、私は眠りにつくか」

ヴァルは椅子に座り、動かなくなった。

「んじゃ帰ろうぜ」

ラルズはフェストに連れられ光の洞窟を出た。

旅の目的

二人は洞窟を出た。すると辺りが揺れた。

「っ！地震か！？」

「いやこの洞窟を出たら洞窟の道が変わるんだ。そのため地面がこ
うして揺れているのさ」

「そうなのか」

「なら、早く神様の所に行くぞ」

フェストは手を翼に変え、飛んだ

。

数分して、フェストは地上へ降りた。羽が抜け落ち、空を舞う。
後ろには足から火を出して飛んでいるアトム：ではなく、ラルズが
いた。

「早く入るぞ」

「おう」

ガチャ…

「神様。ラルズを連れ戻して来ました」

二人は神の居る部屋に入っていた。

「御苦労。で、魔法は使えるようになったか？」

「はい。この通り」

「……………」

「ヒソヒソ…（ほら、なんかやってみるんだ。）」

「じゃ…」

ラルズの目からビームが飛び出し、柱を崩した。

ズドオオオオオン！！

辺りにひびが入る。神はその柱を何もなかったのように戻した。
「どうやらホントのようじゃな」

ドタン！

「神様。やはりラルズを助けるため な…」

扉を開けやってきたのはダブレスだった。

「ラルズ、大丈夫だったんですか？」

「ああ」

「そうですか…なら私はこれで……」

「 さて、なら旅に出てもらおう。」

「旅の目的は？」

「ああ、そうじゃったな。目的はメダルを集めてもらう」

「メダル？」

「そうじゃ、メダルは武力と自然と光の三つじゃ」

「そうか。ならそのメダルはどこにあるんだ？」

「知らん」

「なんだって!？」

「あっち《裏世界》の神に隠されているのじゃ。それにメダルは半分に別れとる。半分はこつちの世界、もう半分はあつちの世界にあるのじゃ。なのでお前にはあつちとこつちを行き来してもらう」

「どうやってあつちにいけないんだ？」

神は手のひらから光の球を生み出し、そしてラルズの胸に押し込んだ。光は消えてしまった。

「今のがあつちとこつちの世界を行き来できる力じゃ」

「そうか」

「よし、それでは旅にいつてもらうぞ」

神は光の扉を作り出し、ラルズをその中に入れた。

……
ボタンー！！

ケーブ村

ラルズは草原で目を覚ました。（よくあるパターンだと作者は思う。）

「ここは？」

辺りを見たが、ラルズ以外に誰もいない。

足もとに無線機がある。ラルズは思わず赤いボタンを押した。馴染みのある声が聞こえてきた。

『はいはい、ここはどこですか？　じゃな。どうじょ』

「その通りです〜どうぞ〜」

『ここはサブル平原じゃよ〜魔法を使えることは人間に言うなよ〜通信終わり〜』

プツ……

ラルズはもう一度ボタンを押した。

『一日に一回じゃ〜通信終わり〜』

プツ……

その音はラルズの堪忍袋の緒が切れた時の音でもあった。ラルズは剣を抜いた。

「oooooooooogg!!」

そして後ろにいたゴブリンを斬った。

「いつの間にかこんなにいたとはな。よし、魔法を試してみよう。」
ラルズは手を上に向け、赤い玉を放った。赤い玉は分裂してゴブ

リン達を襲った。

名づけて、レッドレイン流星群

流星群はゴブリン達と共に爆発し、跡形もなく消えてしまった。

ラルズは横になり倒れてしまう。

「はぁ……はぁ……やばい……」

そして目を閉じてしまった。そこに現れたのは鎌を持った者だった。

ラルズはベッドの上で倒れていた。女は机でコーヒーを飲んでいた。

「ぐ……」

「目を覚ましたか」

女は立て掛けておいた鎌を持つ。

「早く起きろ。早くしないと首を刈り取るぞ」

「お前は……誰だ？」

「言う必要もないね」

女は鎌を振り上げた。

「わかったわかった！」

ラルズは立ち上がった。

「剣はどこだ？」

女は鎌を置いていた場所を指差した。

「……」

ラルズは剣をベルトにはめた。

「お前。あそこで何をしていたんだ？」

「ああ、ゴブリンと戦っていた」

「じゃあ、あの赤い玉は？」

「俺がやった」

女は机を叩いた。

「なんだと！ あんな呪文見たことないぞ！」

「あれはま……」（そういえば神が魔法は人に言うなって言っただけ。）

「ん？」

「まだ俺が完成させたばかりの呪文だ」

「そうか、すごいな、やりすぎだが」

「そりゃどうも」

「出て行け」

「あ、ああ」

ラルズは扉を開けた。そこは小さな集落であり、子供たちがはしゃいでいる。

向こうにある看板には「ケーブ村」と書かれている。ラルズはそこにいた杖を持っている青い瞳の老人に話しかけた。

「呪文って何だ？」

「お前さん。呪文も知らんのか？」

老人は杖をラルズに渡し、手を挙げた。すると手のひらから火の玉が飛び出しラルズの二メートル先にある草むらを焼き尽くした。

「赤の投石じゃ。これが基本的な攻撃呪文じゃな」
ファイアーボール

さらに老人は黄色い光を生み出し焼き尽くされた草むらに当てた。すると草が伸び始めた。

「活性化じゃ。これは回復呪文の基本じゃな」
クレシェンド

「あの……爺さん」

「なんじゃ？」

「攻撃呪文とか回復呪文とか意味がわからない」

「はあ……いいか。呪文には三つの種類がある。攻撃、回復、特殊じゃ。攻撃と回復はさっきわかっただろう？」

「うん」

「特殊はほとんど見ない呪文でな。黒の光や時の力などがあるのじゃ。使えるのはこの世界で数千人しかおらん。この村でも特殊呪文」
ダーク クロックストップ

をえるのはシックルだけなのじゃよ。」

老人は杖を持った。

「さて、もういいじゃろう」

「待って爺さん！」

「……なんじゃ？」

「地図とか売ってる所あるかな」

「この村には無いがここから南東にあるファリス村にあるぞ」

「ああ、ありがとう。爺さん」

「お安いご用じゃ」

ラルズはこの村の出口を探した。

数分後、出口を見つけたが、そこには人だまりが多かった。

ラルズが掻き分けて進んでいると、そこには倒れている兵士がいた。

「おばさん。これはいったい？」

そこにいた40代の女に聞いた。

「知らないよ！ どうしたんだい？」

おばさんは兵士に聞いた。

「ぐ……」

「ほら。なんとかいってみな」

「トロルが……でた……」

その時おばさんは驚きと恐怖に満ちた顔をした。

トロル

辺りを静寂が包む。そんな空気を壊したのはラルズだった。

「トロルって何だ？」

「あんた！ トロルを知らないのかい！？」

おばさんは恐怖を通り越して驚きに満ちた。

「……トロルはこの辺りで一番強いモンスターだよ。あれを倒すなんてほとんど無理だ」

そしてまた恐怖が顔に戻った。

ザッザッザッ……

「なんだ？」

ラルズが住民の先に見た物はその鎌女だった。

「どうしたんだ？ お前」

「シックルさん……トロルが……」

（まさか、こいつがシックルなのか？）

「わかった。どこにいる」

「あの北にある……廃墟」

兵士は気絶してしまった。

「わかった。すぐ行く。みんなは隠れていてくれ」

「シックルさん！ 無茶です！」

「わたしはゴ布林千人抜きの名を持っているんだぞ？」

「……気をつけて」

住民たちは下がって行った。

「ほら、お前も隠れてろ」

「……無理だね、俺はあんたに助けられた。ゴ布林千人抜きだろ
うが一万人数きだろが俺はあんたの ナイトになってやる。借り
はぜってー返す」

「私はもう助けないからな」

二人はケーブ村を抜けた。シックルが口を開けた。

「サーチ敵探知」

すると二人の前に触れられない地図データマップが現れた。

「トロール」

そして地図に赤い点が現れた。赤い点は黒い丸の周りを回っていた。

「よし、行くぞ」

地図は消えた

二人は廃墟についた。住民は元は城だったと言う。だが、ラルズが見たところでは城の面影は全くない。

それをさらに壊している巨人トロールがいた。トロールは茶色い体をしており切れ長の目に大きな口をしている。その手には刀があった。

「さて、狩るか」

シックルは走り出した。あまりのスピードにラルズはついていけない。シックルはトロールのそばに行くと鎌を上空に投げて斬り、そのままジャンプした。

「死にやがれ!!」

そして鎌を持ち急降下した。だが攻撃は剣によって防がれてしまった。

シックルの目の前に拳が近づく。

「やばい!!」

ラルズは頭の中で手から岩が出るのを想像して手をトロールに向けた。

そして想像どおりに直径1mの岩がトロールに一直線に飛んだ。

名づけて、ロックブラスト岩の拳

岩の拳は見事にトロルの顔に当たり、倒れてしまった。

「すまない」

「お安いご用さ。でもちよつとやりすぎたかな」

「お前呪文発明者か何かか？」
マジックリエイター

「え？ あ、うん」

「それにしてもいふんと魔法みたいだな」

「魔法、知っているのか？」

「当たり前だ。伝説の力だからな……って、なんでお前がそんなことを聞くんだ？」

「いや、新米なんぞな」

「呪文学者じゃなくても大抵知っているはずだが……まあいい。とりあえず、お前みたいな貧弱な奴が魔法を使えるってわかったらそいつを絶対狩る」

（魔法が使えること言わなくてよかった……てか、さっき俺に助けられたじゃん）

二人の後ろには大きな影があつた。

「グオオオオオオオオオオオ！！（無視するなあああああ！！）」

ズドオオオオオオオオオ！！

「危ねえ……あやうくペチャンコになる所だったぜ……」

「そういえばこいつのこと忘れてたな」

二人はさっきできたクレーターより10m離れた所に立っていた。

「さつさとケリをつけるぞ」

「OK」

「黒の光！」
ダーク

するとトロルが闇に包まれた。数秒後、闇が消えた時にはトロルはふらふらになっていた。

「体力を削った！ 今だ！ 大技を叩きこめ！！」

「OK！」

ラルズはまず炎を剣に浴びせた。そして燃え上がる剣を手に、トロルを斬りあげた。

次に冷気を剣に浴びせトロルを数回斬った。冷気によって作られた氷がトロルを斬り裂く。

さいごに電気を剣に浴びせ、トロルを斬り倒した。

名づけて三つの秘剣
トライアタック

シューウウウウウ……

トロルが消えていく。シックルは「剥ぎとり^{モンスターゲット}」と言った。するとトロルから光があらわれ、光の中には袋があった。シックルは袋を取り中身を開けた。トロルは完全に消えてしまった。

「トロルの生肉か」

シックルはそう言った。

「うげえ……なんかまずそうだな」

「美味なんだぞ？ 御馳走級さ」

「そうなのか？」

二人は廃墟を去って行った

魔木とジガーブ村

日差しがラルズを照らす。ラルズはトロルを倒したお礼として村長の家に泊めてもらっていた。

「起きてますか？」

ラルズの耳に村長の声が入る。ラルズは目を開けた。

ラルズの目の前には美人の女が立っていた。

この女は父が病で死に、急遽村長になった。料理は得意で昔は家畜モンスター、シーズと静かに暮らしていたと言う。

「起きましたか。もう9時ですよ？」

ラルズは木の時計を見た。たしかに9時だ。

「う……」

ラルズはベッドから起き上がった。

「朝ご飯は食べますか？」

「いや、昨日の飯でまだ腹が……」

「そうですかあ」

女は笑った。昨日、ラルズは御馳走を食べすぎてすぐ寝てしまったのだ。

「んじゃ、俺は旅に出なくちゃな」

「え？ もういいんですか？」

「ああ、どうもありがとう」

「はい」

ラルズは村長の家を出て、ケーブ村を後にした。

「さて、南東は……？」

取り出した住民に貰ったコンパスは村の方を指していた。

「よし」

ラルズは斜め左に歩いて行った。

「怖い」

ラルズは森の前にいた。まだ昼でも暗く、蛇がウロチョロしていた。避けて通ろうとしてもそれでは日が落ちてしまいそうだ。

「行くしかないよなあ」

ラルズは森へ去って行った

ガサツ……ガサツ……

ラルズは草をかき分け進んでいく。森の中には動物は蛇以外いなかった。

「動物は」だが。

ラルズは首を何かで締め付けられた。冷たくてネバネバしている。

触手である。

「ぐ……」

ラルズはナイトソードをひとつとしたが腕が動かない。

（もう、ゲームオーバーか……）

その時、触手が首を絞めるのをやめ、地面に落ちた。

「大丈夫か！」

触手のすぐそばに太刀を持った20代の男がいた。

「おう……」

ラルズが振り向くとそこには巨大な大木があった。触手が生えている。

「魔木さ」

魔木は触手を上に延ばした。

「やばい！ 離れる！」

草むらを触手が襲う。ラルズは回避行動ジャンプで避けたが頭を木にぶつけてしまった。

だが怯んでいる時間もなく、襲ってきた触手を前転で回避する。木は触手に貫かれる。

触手は木を根ごと持ち上げ男に投げる。だが、木は太刀で一刀両断された。

「どっちもやばいなあ……よし」

ラルズは手を鬼木に向けた。

「焼き尽くす!!」

ラルズの手から炎の蛇が現れた。

「名づけて、炎蛇バーニングスネーク!!」

蛇は触手を灰に変え、ますます燃えていく。

ついに蛇が鬼木に当たった。蛇は鬼木を喰らっていく。ついには見る影もなくなり、蛇も消えた。

「ぐっ……やりすぎた」

ラルズはもう手を地面につけていた。

「おい！ 今のは!？」

「俺が作った呪文だよ」

「とりあえず、出口に行こう」

男はラルズの左手を肩にかけ走った。

「ぜえ……ぜえ……」

男はラルズと共に倒れた。どれくらい走っただろう。

「もうすぐでジガー浦村だ」

男は又ラルズを持ち上げる。だがラルズは口を開けた。

「一人で歩ける」

「本当にか？」

「ああ」

「俺は大丈夫。無理すんなよ」

「わかつてる」

ラルズは歩きだした。だが三步で立ち止まった。

「……道案内してくれ」

「あ……」

「……ここがジガーブ村だ」

ジガーブ村はすべての家が壁にレンガを使い、縄で縛った藁を屋根にしている。家の隣には囲いがあり、角が背中の方に伸びている山羊のようなモンスターが二丁三匹いた。おそらくケーブ村の村長が昔育てていたシーズとおなじ家畜モンスターだ。

「ムズギさ。あれから取れる母乳はそのままでもうまいし、バターにしたらもつとうまい。この村の特産品なんだよ」

「詳しいな」

「俺はここに住んでるしムズギを飼ってる」

「そうか」

「まず、俺の家に来い」

ラルズは男について行った。

住人達は下半身に鞭と丈夫そうな木の棒を持っていた。

「ここさ」

ラルズが住民たちを見ている間にあつというまに男の家に着いた。

「まあ中は汚いが入ってくれ」

ラルズは思わぬものを目にした。

中には大剣、双剣、槍など武器が並べられていた。さらに武器や呪文などの厚い本がばらばらと床に落ちている。

「今日は友達が来るから片付けてる途中なんだ」

だが、ノックの音が聞こえた。

「やべっ！ うーん……まあいい、あんたはそこに座っていてくれ」

男は玄関に行った。ラルズは木の椅子に座った。

「よう！」

「やっぱり部屋は汚いな。あいつは誰だ？」

（あの声はまさか……）

ラルズは立ち上がり玄関に顔を覗かせた。
玄関には、あの女が立っていた。

ジガーブ村を守れ！

「シックル！？」

「なっ……」

「何だお前ら、知っているのか？ まあとりあえず、部屋に入れよ」
シックルと男は部屋に入ってきた。散らばる物が端に退かされる。

「俺は狩人^{ハンター}のコルトだ、お前は？」

「ラルズだ」

「そうか。よろしく」

ラルズはコルトと握手をした。

「それにしても奇遇だなあ。俺が助けた奴がシックルの知り合いだったなんて」

コルトは間を空けてこう言った。

「お前、なんであんな所にいたんだ？」

「それは」

ドンドンドン！！

大きなノックの音が聞こえる。コルトがカギを開けるとドアが勢い良く開いた。

「大変だ！！ オークが現れた！！」

「なんだって！？」

シックルが立ち上がる。

「いったい何が起こったんだ？」

「オークが出たんだよ！ 村が襲われている！！」

コルトはそう言いながら太刀を持つ。

「俺は先に行く！」

コルトは家を出て行つた。外から何かの鳴き声が聞こえる。

「オークって何だ？」

「村を頻繁に襲う熊のようなモンスターだよ。今年でもう三つの村が襲われたんだ」

シックルも鎌を持って出て行つた。ラルズも出て行こうとしたがある物を拾つた。

本である。題名は基本的な呪文集。

「これに載つてるやつを使おう……」

ラルズは本を持ち、家を出た。

外では住民が鞭と棒で槍を持った熊たちと戦っている。おそらくあれがオークだろう。

家畜モンスターは逃げ回り、潰れてしまった家も多少ある。

シックルとコルトは途中で武器で斬り、殴り、叩いていた。

「え」と……」

ラルズは本を開いた。目次、注意、極意……まったく呪文が出てこない。

一匹のオークがやってきた。咄嗟にラルズは蹴り飛ばす。

「やっと出てきた」

ラルズが見たのは攻撃呪文の赤の投石である。ファイアーボール以前、ケーブ村に住む老人が見せた呪文だ。

「やってみるか」

ラルズは蹴られたオークに向けて赤の投石をした。ファイアーボール

だが、ラルズが繰り出したのはそれではなく、名づけられファイ赤の超破壊光線アギカビームと言える巨大な光線がオークを消し去つた。

それを見た家に隠れる少年たちは大はしゃぎしている。

「力の加減ができねえ……」

ラルズの体が重くなる。それを見たオークは鬼のように走つてきた。

ズバア！！

その背中を斬るコルト。

「ラルズ、しつかりしろ」

コルトは回復呪文の活性化クレシェントを唱える。黄色の光がラルズを包む。ラルズは体が軽くなるのを感じた。

「ファイト一発！！」

ラルズはオークの群れに突進した。

オークが繰り出す突きをジャンプで避け、オークを踏みつける。ラルズはオークの頭を次々と飛び移った。

そして地面に降り、怯んだところを回転斬りで吹き飛ばす。

「オラオラオラ！！」

ラルズは調子に乗っていた。学校では馬鹿にされるかもしれないけどやっぱり楽しい。

だが、楽しんでいる場合ではない。オークよりもでかい熊が現れたのだ。しかも三匹。

身長は5メートルぐらいだろう。両手には槍を持っている。

住民は怯えていた。あのシックルでさえも。

「くそっ……オークキングか」

コルトはオークの群れを斬りながらオークキングに向かっていく。そして太刀で砂煙を起こした。オークキングが砂煙に包まれている間にコルトは跳んだ。

「叩き斬ってやる！」

だが、オークキングにはそれが見えていたらしく、薙ぎ払いによってコルトは吹き飛ばされてしまった。

コルトは壁に叩きつけられ、気を失った。

「コルト！」

シックルが叫ぶ。ラルズは走り出した。オークキングは両槍を構えた。

トライアタック

「三つの秘剣をやってやる！」

ラルズは炎を剣に宿そうとしたが、オークキングが地面を斬り、砂煙を起こして足止めをし、乱れ突きをしてきた。

完全にはよけきれなかった。

槍は服を破り、皮膚を斬り、出血させる。

「ぐ……」

ラルズは傷に手を当て、傷が治るのを想像した。

そして、傷が塞がり、代わりに疲れがどつと出る。

「次で決めよう」

ラルズは手を上に向けた。

「流星群だ！！」
レッドレイン

赤い玉が空に飛ぶ。そしてあの流星が降ってきた。

流星はオークキングを焼いていた

ムズギの搜索

「明日、ファリス村に行くのか？」

「ああ、地図はもうお前に貰ったけどな」

オークキングとの戦いから三時間後。ラルズ、シックルはコルトの家で休んでいた。

ラルズは再び地図を見る。

北には大きなV字型の谷。矢印には恐怖の谷と書かれている。

北西にはケープ村。中心には森があった。おそらく魔木と戦った森だろう。矢印には蛇の森。

その右下には今から行くファリス村。東にはジガーブ村があった。魔木と戦った後、コルトは南東に行かずに、一番村が近い東の方に行ってしまったのだろう。

西にはセビュラス平原。最後に南にはレイギア城と書いていた。

「それにしても……随分古い地図だなあ」

「約三年間利用してないな」

「でも、結構距離があるぞ？ 今から向かったって朝まで掛かる」

「だがシックル、早朝まで待てばいいだけのことさ」

「早朝まで待つって、どこで寝るんだ？」

「もちろん俺の家さ」

ラルズは家を見回した。とても綺麗とは言えない。むしろ汚い。

「あ、大丈夫。ちゃんと後で片付けるから」

「私が来るときはいつも汚かったが？」

「いや、偶然だよ。ハハ……」

とても偶然とは言えない。

「でもファリス村に行く時にアッパーネイルにあつたらどうする？ もしあの攻撃を喰らったら致命傷にもなりかねないぞ」

「よし！ 待ってるサイちゃん！！」

コルトは家を飛び出した。

「……サイちゃんって？」

「ああ、コルトさんの飼ってるムズギの名前。コルトさんって、サイちゃんのことになるとそれしか考えられなくなるらしいんだよ」

「……まあ、ついに行ってやろうか。ちょうど暇だったし。西って蛇の森がある所だっけ」

「うん」

ラルズは埃玉を少し拝借してコルトの家を出た。村では復旧作業が行われていて、ムズギ達は一つの囲いに入れている。おそらくあそこから抜け出したのだろう。今では住民たちが見張っていた。ラルズはコンパスを取り出して蛇の森へと走って行った。

ゴブリンの群れが現れた！

RPGのゲームに例えるとこんな感じだろう。文字通り蛇の森の途中でゴブリンの群れと遭遇したのだ。

「ozus oatedokok!!」

ゴブリンはそう言いながら棍棒で殴りかかってきた。

（今度こそ成功させよう）

ファイアーボール
赤の投石！！」

手の平から放たれた炎の玉はゴブリンに一直線に飛んで行った。ゴブリンを炎が襲う。

ゴブリンの一匹が倒れる。

「やったぜ！ 成功だ！！」

だが喜んでるうちに腹を棍棒で殴られた。

「ぐほっ！ ああクソ！！」

襲いかかってきたゴブリンを回転斬りで吹き飛ばし、そのまま目の前の宙に浮くゴブリンを地面にかかと落として地面に叩きつける。
「ん？」

影が左から飛び込んでどんどん大きくなっていく。

「見 え 見 えっと！」

ラルズは倒れるゴブリンから離れた。倒れていたゴブリンと上空から叩こうとしたゴブリンに押し潰されてしまった。後ろからゴブリンが棍棒を投げる。ラルズはその三つの棍棒を横に斬ってゴブリンに弾き返し、残りの二つはしゃがみ避けて後ろのゴブリンに当たらせる。

後ろのゴブリンは息絶えてしまい、前のゴブリン三匹は弾き返された棍棒に当たり、倒れてしまった。

残っている一匹のゴブリンはもう一匹の棍棒を奪った。

「usorokubbiatezz!!」

ゴブリンは酔ったように棍棒を振り回しながら近づいてきた。一発一発は適当だが手数によって反撃ができない。

「どうすれば……」

その時ラルズはもう一匹のゴブリンに目がついた。そのゴブリンは武器が無いので立ち往生している。

ラルズは目の前にいるゴブリンの攻撃を何とか掻い潜り、立ち往生していたゴブリンをつかみ上げた。

「いくらなんでも仲間に攻撃はできないだろう」

ラルズの予想通り、ゴブリンは攻撃ができなくなり、もう一匹のゴブリンとぶつかり倒れてしまった。

「止め！」

ラルズは地面に剣を突き刺し、そのまま二匹のゴブリンへ走りだ

す。

そして、炎を剣に当てた。剣は炎上して辺りの草を燃やしていく。
フアイアアップバー

「噴火！！」

ラルズはゴブリン達を斬り上げた。ゴブリンは燃えながら宙を舞った。

「早く急いだ方がいいな」

剣を鞘にしまってラルズは走り出した

「サイちゃー！ーん！！ どこだー！ーん！！」

コルトは蛇の森で草を斬りながらムズギを探していた。

「くそ……いない」

ガキッ……

太刀が何かに弾かれた。目の前には岩がある。

だが、それは岩では無かった。

コルトは岩の塊に叩き飛ばされる。

「こいつは……ドーグ！？ なぜこんな所に」

言っている間にもコルトは岩の弾に襲われる。コルトは太刀を回して弾き飛ばしていた。

「ぐ……」

ドーグ
岩は手が生えていた。周りには岩が浮いていた。その赤い眼はコルトを一直線に睨みつけている。

そして太刀の回転防壁を潜り抜けた岩の弾が左の肩を強打した。

「動かない……ここで終わりか」

「貴様の目は節穴かつ!!」

その声がした後、直後に氷柱が雨のように降ってきた。その中にはラルズもいる。

「……ウソだろ？」

氷柱はドーグに刺さっていた。岩と氷柱。どちらが負けるかはわかるだろう。

その氷柱は鋭く、透明。奥にいるラルズが映し出されている。

アイスナイフレイン
「氷柱の雨」

氷柱は割れ、ラルズは刺さっている剣を抜いた。ドーグは倒れ、浮いていた岩は動かなくなり落ちる。

「大丈夫か？」

「……すまない」

コルトは傷ついた方に手を置いた。

ケア
「祝福」

すると緑光が傷を包む。コルトは肩を回して異常がないか確かめた。そして、

「サイちゃーーーーーん!!」

走り出した。

「少し……待て……」

ラルズはかなり疲れていた。

そして蛇の森の出口でコルトを見た。

動かないムズギ。その前にいるトロル。

コルトは目を疑った。そして

ズバァン!!……

トロルを空中から一刀両断した。

ラルズはその光景を見ていた。

「……コルト？」

「ああ……すまない……帰ろう……」

その後、ジガーブ村に二人は帰ってきた。

二人が家に入ると少年がコルトに抱きついてきた。

「コルトさん！！ サイピーちゃんを見つけたよ！」

「……え？」

コルトの目の前にいたのは一匹のムズギ。首には印であるリボン。

「……っ!？」

「なんだ……違うムズギだったのか……」

「サイちゃーん……………ん!!!!!!」

コルトはムズギへと走って行った

畑荒らしさん

ラルズは一晩コルトの家の埃っぽい部屋で泊まった。何度かくしやみをしたが、それでもよく眠れていた。あんな運動をしたのだから。

「そういえば、あの無線機……」

ラルズは無線機を取り出し、赤いボタンを押した。

「何じゃ〜？」

「なあ……一体いつになったらメダルを見つけれらるんだ？」

「それは知らんよ。お前さん次第じゃ」

「やっぱりそう言うと思ったぜ……」

「だが」

「ん？」

「いいことをすると、メダルが自然に集まってくるらしいぞ」

「本当か？」

「ああ、そうじゃ」

「なら、俺は善人でなければいけないのか？」

「最初っから善人を選んだが……お前は仕方なくなっただけじゃからな」

「仕方なくって……」

「そうじゃが？ 文句でもあるのか？」

「もう通信終了していい？ 喧嘩になりそうだから」

プチッ……

「あ、あっちから切られた」

ラルズは無線機を投げ捨て眠りについた。

コロコロコロ……

何かの鳴き声。それでラルズは目覚めた。

「もう……朝か……」

ラルズは起き上がり、埃っぽい部屋から出て、ソファで眠っているコルトを横切り、家を出た。

「すゝはゝすゝはゝ……」

ラルズは深呼吸し、叫ぶ。

「空気がうまー……いい……!」

余程あの部屋が嫌いだったのだろう。ラルズの叫び声によってコルトも目覚めた。

「おいおい……うるさいぞ……」

コルトも外に出る。シッケルはもうケープ村に帰った。

「いよつす……!」

ラルズは少し手を上げてコルトにあいさつをした。

「随分テンション高いな……」

「そうか? へへっ」

ラルズは草むらに寝転がった。青い空、白い雲、眩しい太陽、空を飛ぶ船。

「……ん? 空を飛ぶ船?」

一瞬ジガー・プ村が暗くなった。その船が太陽を遮ったのだ。

何か大量の紙が落ちてくる。コルトはそれを掴み取った。

「……今日も俺の家で止まることになったな。ラルズ」

「ええ!? なんで?」

「だって……見てみるよ」

コルトはラルズのその紙を渡した。

「クラッシャーが南東にいやがる。今日はファリス村に行けないんだよ」

紙には地図と赤いカメのようなモンスターが描かれている。地図

の南東に大きな赤丸が付いていた。

そして一番上に書かれた言葉がD a n g e r。^{デンジャー}

「こいつがいるせいで南東には行けないのか？」

「ああ」

「でもこいつ弱そうじゃね？」

「はあ？ こいつは災害レベルのモンスターだぞ。繁殖力は非常に弱いが強いのモンスターなんだ。こいつが一步步いただけで小さなクレーターができちゃうし、こいつが繰り出すビームは目の前のものをすべて吹き飛ばさせるんだ。凶暴では無いんだがそれでもこいつに近づくと自然に死んでしまうんだよ。それでついたあだ名が

「

「 永遠なる孤独者」

「 ……なるほど。危険すぎて誰も近づけないからか」

「 だから今日も俺の家で泊まることになる。いいな？」

「 またあの部屋？」

「 そうだ」

「 はあ」

ラルズは一日中ダラダラしているのも悪いので最近問題になっている「畑荒らしさん」と言うモンスターを倒すことになった。

「 ここが畑荒らしさんの巣だ」

案内係である畑の主に連れられてやってきたのはある洞窟だった。

「 なんか変な名前のモンスターだなあ……」

「 結構凶暴なんだぞ？ あいつが何匹も集まるとこの村もイチコロだな……」

畑の主は腰にナイフをぶら下げて言った。

「 さて、俺はここで待っておく。畑荒らしさんを倒したらまたこっちに来てくれ。報酬はたんまりやるからさ。」

「 お、おう」

ラルズは洞窟へ入って行った。

「暗いなあ……」

ラルズは人差し指に炎を灯し、狭い洞窟を進む。どこからかカシヤカシヤと言う音が鳴っていた。

「不気味だなあ……」

その音はだんだん大きくなっていく。ラルズはたいまつを生み出し、炎を灯した。

ラルズはその時何かが後ろから迫っていることに気付いた。

カシヤカシヤカシヤカシヤ

疲れ果てて……「お父さん？」

バーニングスネーク
「炎蛇！！！」

ラルズは後ろに手を向け、炎の蛇を出した。
後ろにいた何かは燃やされていく。

「キシヤアアアアアアア……」

それは巨大なアリだった。ラルズがいた世界のアリとかなり似ていて、まだ奥には十匹ほどいる。ラルズは前のように疲れはしなかった。

「どうやら、慣れてきたようだ……ってどこだ？」

ラルズは地図をもらっていない。

「出口を探すか……」

ラルズはとりあえずたいまつを増やした。

その時、また後ろからアリがやってきた。

「こいつら火によってくるのか！？」

ラルズは奥へと逃げ込んだ。アリは揉みくちやになりながら追ってくる。少しずつ少しずつとアリはラルズに近づいていた。

「くそっ」

ラルズは走りながら左手をピストルの形に変え、石の弾を撃った。これで少しは足止めでき、体力の消費もほとんどないだろう。だが、アリはそれにもかかわらずラルズに近づいていた。

ラルズは無線機を取り出し、ボタンを押す。

プッ……

『この電話はただ今出ることができません。ピーと言う発信音が鳴

つたら 』

「そんなこと言ってる暇ないんだよ！！ 銃を貸してくれないか！？」

『あのスチームルガー・ブラックホークか？』

「そうそう！！」

『無理。』

「なんで！？」

『だってさーそっちには銃は存在しないんだしー』

「誰もいないからばれないって！ それに俺が死んでもいいのか！？」

アリはラルズの5メートルにまで近づいている。そして大きな口を開けていた。どうやらラルズを捕食しようとしているらしい。

『別にいい。他のやつに後頼めばいいし。』

「ひとでなし！！ それでも神様がバカヤロー！！」

ラルズとアリの距離4メートル。

「あれ？ そんなこと言っただったら断っちゃおうかなー？」

「すいません。もうこんなこと言いません。お願いしますから神様、どうか銃を貸してください」

「そうそう。それでいい」

プツッ

ラルズは剣を取った。剣が形を変え銃に変わっていく。

「散々怖がらせてくれたなー！！」

ラルズは銃を構えアリたちを撃った。アリたちは次々と倒れていく。マガジンはなぜかポケットに最初から入っていた。

ラルズはすべて弾を撃ち尽くしマガジンを抜いてポケットに入っているマガジンを装填する。ラルズがマガジンをポケットから出したときにはもう新しいマガジンが入っていた。

「弾は無限ってことね！」

ラルズはアリを一匹残らず射殺した。

ゴオン！……

ラルズは岩の薄い壁を蹴りで穴を空ける。もちろん魔法を使用している。生身でこんなことをラルズは出来るわけがない。

「さて……ここはどこだ？」

ラルズは剣を抜き、辺りを警戒した。どうやらアリはいないらしい。だが天井に蕾がある。

「あれが開くとか？」

ゴゴゴゴ……

「ヤッパリダヨネ。」

蕾が開き、花が咲いた。中心にある種が雨のように降ってくる。

「マシンガンみたいだな……」

ラルズは種を弾き返す。種は鋭く棘のようだ。

「さつさと終わらせる……」

ラルズは走り出した。キンキンとリズムを刻みながら種を弾き返す。そして大きくジャンプし、両手を花の方向に突き出した。

「赤の超破壊光線！！」
ファイアギガヒーム

ラルズの両手から巨大な赤い光線が飛び出し、ラルズはその光線のせいで壁に叩きつけられ、花は黒焦げになってしまった。

ドッ……

「ぐ……いてえ……」

ラルズは地面に落ちた。右手が骨折したらしい。ラルズは最後の力を振り絞って骨を元通りにする。

「もう体が動かないや……ハハ……」

ラルズはそのまま目を閉じてしまった。

「お父さん？」

ラルズはその声で目を覚ました。

だったら一緒に旅をしないか？

ラルズが見たのは黒い人型の塊だった。顔と思われる部分には赤い眼が二つ付いている。

「お父さんなの？ いや、お母さんだね」

ラルズはその塊に話しかけられた。口の中は赤色。

「お前……誰だ？」

「……………わかんない」

「どういうことだ？」

「僕まだ名前つけてもらってないから」

「僕と言うことは……か」

「うん。ぴったり合った名前をつけてね」

「何で俺が？」

「だって、お母さんなんでしょ？」

「へ？」

ラルズはさっきの言葉を覚えてなかったらしい。

「だってお母さんじゃん。一番最初に見つけたんだから」

「俺は……母親じゃないぞ」

「え！？ そうなの！！」

「そう。女でもないし」

「そうか……ごめん」

黒い塊は奥へと進んでいった。

「良かったら……一緒に探すか？」

「ホントに！」

「出口もわからないしな」

ラルズは塊と共に「お母さん」を探すこととなった。

「とりあえずこのままじゃ呼びにくいんで、お母さんを見つけるまではククルって呼んでいいか？」

「うん。分かった。君の名前は？」

「ラルズだ」

「じゃあラルズさん。宜しくね」

「ああ」

ラルズとククルは握手した。感触は人間そっくりである。その時、後ろからアリがやってきた。

「くそっ……」

「何！？ あれ！！」

「モンスターだ！ 早く逃げろ！！」

ラルズはまだ少しだけ疲れていた。だが、ククルは逃がさなければと思った。

「僕たちを襲う気なの？」

「多分……そうだろうな」

「じゃあ、ラルズさんを守らなきゃね」

ククルは走り出した。アリは威嚇している。

「駄目だ！ やめろ！！」

ククルはその言葉を無視してアリに向かっていく。

ラルズは目を閉じた。だが次にラルズが見たのは

ククルがアリを喰らっている姿だった。ラルズは驚きのあまり地面にしりもちをついた。そしてククルの口の中からゴクンと言う音が聞こえた。

だが、ククルの体に異常はない。あれだけ巨大なモンスターを喰らったのに。

「……不味い」

ククルは腹を押さえる。ラルズは剣を地面に突き刺して立ち上がった。

「お前……あいつを喰ったのか？」

「うん。不味かったけど。立てる？」

「ああ……」

ラルズは剣を仕舞ってククルに問う。

「何でお前はあんなやつを食えるんだ？」

「……わかんない。自分のこと何も教えてもらってないから」

「お前、卵から生まれた？」

「うん。多分ね」

ラルズはククルが入っていた卵なんて想像できない。

「だから僕生まれただばかりなんだ」

「……………」

育児放棄。ラルズの脳内にこの言葉が浮かび上がった。その言葉を振り払うように頭を叩く。

「……お母さん、探しに行こうか」

「うん」

ラルズがこの世界の神とこの世界に初めて来たとき、親は旅行に行っていた。ラルズ一人を残して。

親はラルズを嫌っていた。お前のせいで自分も馬鹿にされると親が言っていたのをラルズは覚えている。

ラルズは頭も悪く、体力も無いダメダメな人間だった。そして自信をなくし、何もかもどうでもいいと思うようになってきていた。

そして大人の姿に変わり本当に一番驚いたのは自分の身体能力の高さである。あのまま育っていたらあれまで身体能力が高いわけがない。

そんな事を考えながら進んでいくと、前から何かが来た。アリでは無い。人である。

「人だ！！」

ラルズは走った。慌ててククルもついてくる。

その者は大きな鎌を持っていた。

「何だ。お前か。奇遇だな」

ラルズが見つけたのはシックルだった。

「お母さん？」

「何だ？ コイツ」

「いや、ちよつとね」

ラルズはシックルに今までの出来事を話した。

「……ここまでにそのククルと言う奴に似た奴は居なかったぞ」

「そんな」

ククルは地面に膝をついた。黒い雫が地面に落ちる。涙だろう。

「……育児放棄」

ラルズはそう呟いた。シックルが眉を少し動かす。

「僕……どうすればいい？」

ククルがラルズに問う。ラルズは考え込んでいた。シックルも同じだ。ククルは俯いた。

「………だったら一緒に旅をしないか？」

滑り落ちる。

ラルズとシックルは驚いていた。自分と相手の言ったことが同じ
だと言う事に。

「……なんで、旅をしようって?」

ククルが一人に聞く。シックルが口を開いた。

「フリーハンターになるいい機会だったからな」

「フリーハンターって？」

隣にいたラルズが聞く。

「チームに所属して依頼をこなすギルドハンターとは違って旅をしながら依頼をこなすハンターだよ」

「で、ラルズさんは？」

ククルが首を傾げながらラルズに聞く。

「俺は……ある物を探してる」

「ある物つて？」

「それは……言えない」

「じゃあ、三人でしよう!!」

「え？」

「だって大勢で旅をしたほうが楽しいじゃん！」

[illegible]

こうしてラルズとシックルとククルが共に旅をする事となった。

「とりあえず、まずはケープ村に戻らなくてはな、旅の準備もあることだし」

洞窟の入り口でシッケルが言った。外は太陽が真上に出て、雲は

一つもない。ラルズは首を縦に振る。

「何処でもいいから行こうよ！」

ククルは腕を回したりジャンプしたりしていた。

三人は頑丈そうな木の板を三つ見つけ、三人は坂の上からその板に乗った。

「バランス取れるか？」

中心にいたラルズが二人に聞く。

「一応……な」

「これを使つて坂を滑り落ちるの？」

「その通りだ。できるか？」

「多分……」

「よし、それじゃあ行くか」

ラルズは前屈みになった。板は坂を滑り落ちる。ラルズは両手でバランスを保つ。

「早くお前たちも来い！」

「わかつてる！」

「やつぱり怖い……でも行く！」

二人もラルズを真似して前屈みになり、坂を滑り落ちる。シックルはバランスを保っているがククルは左右に揺れていた。

「大丈夫かー！ ククルー！」

岩や木を避けながらラルズは言う。

「なんとかー！……つて、おわっ！？」

ククルが乗っていた板が岩にぶつかって割れてしまった。ククルは吹っ飛んで木に叩きつけられた。

しかしその木が腐っていたのかポキッと折れ、そのまま坂を滑って行った。ククルはその木につかまっている。

「……すげえなあ……」

「やつぱらこういうの嫌だああー！」

ククルは絶叫しながらラルズとシックルの前を滑って行った。

その100m先にゴブリン達。

ゴ布林達はたき火をしながら木の下で休んでいた。一匹は薪を火に投げ、一匹は何かの肉の串焼きを作り、一匹は木にもたれかかって寝ている。

そんな休息を壊したのはククルと一本の木だった。

「どいてええええええ！」

ククルが叫んだが、ゴ布林達は聞いていない。ついに木がゴ布林達を襲った。

一匹は木を避け、一匹はぶつ飛んで、一匹はそんなことも気にせず寝ている。

最後の一匹は起きた時にはア然するだろう。

「あゝ、ご愁傷様です」

「その意味分かってる？ お前」

二人はその後ろを滑りすぎて行った。

バリ
リ
リ
リ
リ
リ
リ
リ
...

「んべしっ!!」

麓まで滑り落ちて行ったククルは木と共に平地に激突し、木は割れてククルは吹っ飛んで地面に激突。

その後ろにいた二人は何事もなく平地でゆっくりと止まった。

「大丈夫か？　ククル」

「た、多分……大丈夫……」

三人はそのままジガー村へとついたのであった……

滑り落ちる。(後書き)

ゴブリン達のような休息したいです……

ゴブリン大群と永遠なる孤独者

ラルズ、シックル、そしてククルの三人がジガーブ村を通ると、シックルが異変に気付いた。

「誰も……いない。」

「ああ、そうだな」

ラルズも気付いていたらしい。ククルは周りの建物に興味津津だ。

「誰がいるかー！」

シックルが叫ぶ。だが村人の声は聞こえない。

「もう少し進んでみよう」

三人は周りを見渡しながら少しずつ先へと進む。

そして村の出口に誰かを発見した。

「コルト……？」

シックルが呟く。ラルズの見た通りでは正解だろう。だがその「誰か」は両手に太刀が握られていた。

「……シックルか。」

その声からしてコルトであることは間違いない。だが、どこか様子がおかしい。

「今すぐここから逃げるんだ」

「どういうことだ……？」

「もうすぐゴブリンの大群が来る。俺はここに残り、迎撃する」

「どこから来るんだ？」

「恐怖の谷からだ」

「恐怖の谷！？ あそこのゴブリンは呪文を使うんだぞ！！」

「わかってるさ……」

「死ぬ事が怖くないのか！？」

「怖いさ！！」

「っ！……」

「死ぬ覚悟はできたはずなのに正直マジでビビってる、だけど！！
それでも俺はこの村を守りたい！！その気持ちのほうが強いんだ
よ！！」

「なら、俺も手伝おうか」

「ラルズ！？」

「この村には世話になったからな」

「なら僕もやる！」

「お前……誰だ？」

「それは後！」

「……もういい！ あくまでもこの村のためなんだからな！！」

「すまないな……シッケル」

「え……いや……だからお前のためじゃないんだよ」

「……ツンデレ？」

「違う！！」

ボスッ！

「ぐ……痛いじゃないか！！」

「……三人とも。おしゃべりはここまでにしよう」

「「ん？」「ん？」」

ドドドドドドドドドド……

棍棒を持ちこちらに迫ってくる青いゴブリンの群れ。赤いゴブリンとは少し目つきが違う。

「ファイアーボール
赤の投石！！」

シックルが手をゴブリン達に向け、十個の火の玉を放つ。

放たれた炎の玉は次々とゴブリン達に直撃する。その中にコルト、ラルズ、ククルは突進した。

コルトは両手にある二本の太刀でゴブリンを薙ぎ払う。

ククルはゴブリンから奪った棍棒でゴブリン達を次々と殴り倒していた。

ラルズは片手にある剣で地道ではあるが一匹一匹確実に倒し、時には魔法で一網打尽にしていた。

「ur - ob - adnas！！」

ゴブリン達は一斉にその言葉を言った。その瞬間、稲妻の玉が四人に襲いかかってくる。

「黒の光！！」
ダーク

シックルがその呪文を唱えると闇が全ての稲妻の玉を覆い、消し去ってしまった。

「すまない、シックル」

「早くこいつらを倒すぞ！！」

コルトは頷き、両手を体に交差させるようにして太刀を後ろに向けた。

「バルドライク流戦技・太刀一の技」

ゴブリン達はコルトに迫る。

「一閃！！」

スパアアン！！

コルトは踏み込んでから突進すると同時に太刀でゴブリンを横に一刀両断にした。

「…… すごい」

そう言いながらもラルズは魔法、バーニングスネーク炎蛇でゴブリンを焼き殺していた。

ククルは棍棒で攻撃している。いや、暴れている。

シックルは今も呪文でゴブリンを一掃している。だが、ゴブリンの数は一向に減らない。

「くそっ、きりがないぞ！！」

「俺はあきらめねえよ！！」

コルトは空高くジャンプした。彼の跳躍力はかなり高いだろう。

「バルドライク流戦技・太刀二の技、落雷！！」

コルトは急降下しながら太刀を縦に下ろし、衝撃波でゴブリン達を吹き飛ばした。

開いた口がふさがらない状態になってしまったラルズはとりあえず回転してゴブリンを斬り続けた。

そのうち目が回ってしまい、ゴブリンに攻撃されそうになった時、地中から何かが飛び出し、ゴブリンにアッパーを喰らわせた。

「大丈夫？」

「大丈夫じゃないことがわかるだろ？ ククル」

「それにしてもきりがないね」

「ああ……」

その時、極端に短い地震が起きた。いや、足音である。

その足音は遅いリズムを刻みながらだんだん大きくなっていく。

四人が後ろを振り返ると、奥に巨大なカメがいた。牙が生えており、爪は鋭く、足跡らしきクレーターは村一つでもはいれるほどの大きさである。ラルズは恐怖を感じ、心臓を押さえた。

「こいつが、永遠なる孤独者……？」

「皆逃げろ！！」

ア然としているククルの手を握り、ラルズは走る。

途中で逃げているゴブリンを斬りながら、ラルズは村へと逃げて行った。

母が愛しい

「ぜえ……ぜえ……」

ラルズは地面に手と膝を付いた。

ゴブリンの大群とクラッシャーはいない。だが、四人とゴブリン達が争った平野は幾つもの穴が開いていた。

「大丈夫か？ 二人とも……」

立ち上がったコルトが三人に聞く。ラルズは「ああ。」と一言だけ返し、シックルはこくりとうなずいた。ククルはピースサインを出している。

「しかし、でかかったな……」

「ああ、俺も見たことは初めてだ」

コルトもクラッシャーを初めて見たらしい。だが、クラッシャーと遭遇した時、そんなに驚いてはいない様子だったをラルズは覚えている。

「広い部屋を貸してやるから、今日は俺の家で休め」

「ああ……」

三人がコルトに先導され、一つの扉を開けてみると、中は暗く、武器や鎧がかけられていた。そして、片隅には箱が重ねて置かれている。その近くにはベットが二つ。

そして窓から差し込む月の光に照らされた所は何か白い物が沢山まっていた。

（やっぱり埃だらけ……）

「クシユン！！」

ククルがくしゃみをする。

「おいコルト！！ この埃の部屋を何とかしてくれないか！！」
シックルが鼻を摘まみながら何気なく口に出す。

「物置だから仕方ないだろ」

コルトは呆れたように言う。

「仕方ないわけないだろ！！ 早く何とかしろ！！」

「わかったわかった。埃吸収袋渡すからそれで我慢しろ」

そう言うコルトはどこからか三つの白い袋を持ってきた。シッ
クルはそれを受け取ると空中に投げた。

すると瞬きもする間にまっていた埃が一瞬にして消え、パサッと
縄で口を縛られた袋が床に落ちた。それを拾ったククルは不思議そ
うに見ている。

「そいつを俺に渡してくれ」

「う、うん」

ククルはそれを両手でコルトに渡した。

「じゃあ、ゆっくり休んでくれ」

ボタン！

「さて、寝るか」

ラルズはベットを窓の方に動かすと、剣を床に置いてベッドヘダ
イブした。

ドッ

ドッ

「……シックル。何してんだ？」

「仕切りを作ってるんだよ。お前に寝顔を見せたくないからな」

「ククルは？」

「こっちのベッドで寝る」

「いいな～いいな～」

ラルズは冗談で言ったが、その時

ヒュルルルル

「っ!？」

ザクッ!!

ラルズが横になっているベッドの10?近くに鎌が刺さっていた。

「ちょ、おま」

「私は正確にお前を殺せるように投げたんだが、お前、運がいいな」

「は、はあ……」(これがいつまでも続いたら旅が終わる前に死ぬな……)

数分すると、三人は全員眠っていた。だが、ククルはラルズが眠っていたベッドに移っていた。

「うつ　　ぐ　　やめろ　　やめて　　くれ
」

ラルズはその唸り声を聞いていた。それは明らかにシックルの声だった。

朝。窓からの日差しがラルズの顔に当たる。ラルズはゆっくりと重そうな瞼を開け、起き上がろうとした。だが、何かに手を掴まれていた。

手を掴んでいたのはククルだった。ククルはまだ眠っている。

「……仕方ないなあ」

ラルズは窓をあけ、外からの景色を眺め、ククルが起きるのを待つことにした。

（あの唸り声は一体なんだったんだろう）

「お母さん……」

ククルがそう寝言を言う。それと同時に手を握る力が強くなる。

（余程、母が会いたいんだな……）

ラルズはその寝言でククルを絶対に母親に合わせると決断した。

穢れ戦争

ククルが目を覚ました。外では小鳥がさえずっている。太陽は眩しく、コルトの飼っているムズギは鳴き、横ではラルズが眠っている。

ククルはシックルがいない事を知ると、扉を開けて、外へと出た。すぐそばでコルトは刀を手入れし、シックルは呪文集を読んでいる。シックルがこちらに気付いた。

「おはよう。ククル」

「おはようございます、シックルさん。コルトさんも」

「ああ」

どうやらコルトは刀の手入れを真剣にやっているらしい。シックルが呪文集を閉じ、どこからか大きな石を持ってきた。

「まずは土の属性を少し……」

シックルが呟く。掌に茶色い炎のようなものが出てきた。

「そして火の属性を多く……」

次には炎が掌を覆った。それでも茶色い炎は出て続けている。そして、シックルがその手を地面につけた。

アンダーファイア
「噴き出す炎！！」

その時、小さな地割れが起き、そこから炎が噴き出す。それはシックルから一直線に進み、最後には大きい石に当たる。だが、大きい石は一部が焦げたただけだった。

「これが、アンダーファイア噴き出す炎か。ならば次はその進化系か……」

シックルはまた掌を大きな石に向けた。

「まずは土の属性を多く……」

また掌から茶色い炎が出てきた。

「次に水の属性を少し……」

次は青い炎が出てくる。

「最後に火の属性を多く……」

掌がまた炎に包まれる。シックルが地面に手をついた。

「ホルケーノフダイア噴き出す溶岩――！」

シックルが叫んだ。が、掌の近くから小さな爆発が起こった。地面についていた手はそこから離れる。噴き出すはずの溶岩はどこにもなかった。

「今、何が起こったんですか？」

「返しの爆発だよ。失敗したとき、こうなるんだ。順番を間違えたか？」

シックルはもう一度茶色の炎を出す。その次に、今度は炎が掌を包んで最後に青い炎を出した。

「ホルケーノフダイア噴き出す溶岩――！」

もう一度地面に手をついた。石が急にいなくなった。

「消えた――？」

「いや、落ちただけだ」

そして石が溶岩に押し出される。石は跡形もなく消えてしまった。後はどうするんだ？」

「え？」

「溶岩をどう処理するんだ？」

「忘れてた」

「ウォータービームまったく……放水」

コルトの掌から水のビームが放たれ、溶岩が煙を立てて固まった。

「よし　　そういえば、ラルズは？」

コルトが刀を鞘に仕舞ってククルに聞く。

「多分まだ寝ていると思う」

「そうか……」

シックルがコルトの家に入った。そして、何かを殴る音と、ラルズの悲痛な叫び声が聞こえた

「大丈夫ですか？」

「こめかみを殴られた……いてえなあ……」

「起きない方が悪いんだよ」

「シックル。それにしてもやりすぎだと思っ……」

コルトはため息をつき、シックルは呪文集を読み、ラルズは頭を痛そうにして、ククルはそれを見ていた。

「これからどうするんだ？」

コルトが鞘に仕舞われた刀を背中にかけてながら言った。

「ああ。こいつらと旅をしようと思っんだ」

「旅？」

「ああ。フリーハンターになるつもりだ」

「そうか……ラルズは？」

「探しものさ。で、ククルが三人で旅をするのがお望みで」

「こんなことになったんだよ」

「……旅をするんなら、ククル。ついてきな」

コルトはククルを自分の家に促した。ククルはある部屋にたどりつく。その部屋は服が沢山飾られていた。

「お前は人間の形をしているが、モンスターだ。お前に敵意はなくても相手が怯えるかもしれない。姿を隠さなければいけないんだよ」
「でも、敵意がなかったら怯えられるものないかもしれないじゃん！」

コルトはしゃがみ、ククルの目線に合した。

「……ガイ・ザムス穢れ戦争を知っているか？」

「穢れ戦争？ 何それ」

コルトは置いてあった木の椅子に座り、話し始めた。

「今から数百年前、この大陸で一番巨大な国の王はモンスターを護衛に置いていた。その時代は、モンスターは人間の言葉を理解し、協力し合って平和に生きていたという。だが、その国王の巨大な怒りに一匹の護衛が触れてしまい、国王はその者を公開処刑したのだ」

「公開処刑……」

「怒りに狂った国王は兵を使い、次々とモンスターを虐殺した。反感を持つ者は次々と処刑させられたという……」

ククルは俯いたまま黙っていた。

「国王の怒りは収まらず、ついに他の国までもモンスターの血で染めようとした。中には対抗しようとする国もあったが、巨大な国に勝てるはずもなく、滅んでいった。そして、ついにモンスターたちが連合軍をつくった」

コルトはまだ話し続ける。

「連合軍はその国だけでは無く、人間その者を絶滅させようと考えた。それが穢れ戦争の始まりさ……戦場となったセビュラス平原は死体で埋め尽くされたという。だが、争いは互角に続き、いや、続きすぎて穢れ戦争は、結局どちらの軍にも勝利をもたらさず、終わった訳さ……」

「そんなことがあったんだ……」

「そのおかげで、今は人間とモンスターに、透明だが分厚く、そして固い壁が作られているんだ。モンスターも徐々に人間の言葉を捨て、独自の言葉を使っていた……お前は本当に珍しい奴だよ。今もなお、人間の言葉を話すなんて」

「僕が生まれた時にはもう、それを知っていました」

「そうなのか……だが、それでも壁を壊すことは不可能なんだ」

コルトはサイズがかなり小さいが、ククルにはぴったりの青い長袖のズボンと黒い長袖の上着をククルに渡した。

「これを着てくれ」

ククルは渋々服を着始めた。コルトはまた何かを持ってくる。紫のフードが付いたマントと白い手袋だ。

コルトはマントを広げたものをククルの頭以外に被せ、首元の両端にあるボタンを止めた。その手を放すと、守るようにマントがククルを包んでいた。そしてコルトはフードを被せる。

ククルの顔はほとんど見えない状態になってしまった。コルトは手袋をククルにはめさした。

「これで完了だ」

ククルは体のほとんどを服で隠され、モンスターとは分からない状態になってしまった。

「なんだか……暑いです」

「すまないが、これくらいしかなかったんだ。お前の身長に合うものなんてどこにもなかったから……後は靴だな」

コルトは箱を漁り始めた。そして、ずいぶんと古そうな靴を持ってきた。

「これでどうだ？」

ククルはその靴を履く。

「ぴったりです」

「これで終わりだ。皆の所に行つてこい」
ククルは扉を開けた。

言ってる場合か

「戻ったか、ククル……ってなんだその姿は」

ラルズが本来の姿を隠したククルを見て言った。シックルはすぐにそのわけをわかった顔をしている。

「敵視されないためか」

「ああ。ククル、どうだ？」

「すごく……暑い」

「すまんが、そこらへんは我慢してくれ」

シックルが鎌を地面に突き刺し、立ち上がった。

「ラルズ、ククルは先にレイギア城に向かってくれ」

「レイギア……城？」

「ここから南にある。それでもわからないなら地図を見る」

コルトが地図を腰につけているポーチから出して、ラルズに投げ渡す。

丸められた地図を広げ、ラルズは口を開く。

「シックルはどうするんだ？」

「ああ。私は一度ケープ村に戻って旅の準備をしておく」

「レイギア城についたらどうするんだ？」

「そこにある城下町の酒場の前で待っていてくれ。私もそちらに向かう」

「わかった」

シックルはククルの顔を一瞬瞳に映すと踵を返し、鎌を地面から抜いてその場を去っていった。

「地図、もらっていいか？」

「別にいいぜ。ほかのものもあるしな」

「すまない」

ラルズは自分のポーチに地図を丸めて入れた。そのポーチには地図のほかにはコルトから拝借した埃玉がある。もう一つのポーチには

無線機が入っていた。

「さて、コルト。俺たちも行くよ」

「じゃあな」

「ああ。ククル。行くぞ」

「う、うん」

ラルズも、その場を離れ、ククルはコルトに駆け寄った。

「……なんだ？」

「また……会える？」

「ああ。会える」

ククルは頷くと、待っているラルズの方へ走り去っていった。

「ククル、何してたんだ？」

「ちよつとね」

ククルの顔はほころんでいた。ラルズはその理由がわかったように感じ、同じようにほころんだ。

ラルズとククルが村を出た十分後、朝日を浴びて、コルトはムズギを囲んでいる木の柵に座り、青い空を見上げた。小鳥が家の屋根を飛び移っている。

「俺も、ひさしぶりに旅してみようかな」

小鳥が巣にいる子を残して、空へと飛び出した。

その小鳥をコルトはいつまでも見つめていた。

「ラルズさん、こういうときはどうすればいいの？ 例えば敵がいっぱいいいて、隠れているけど見つかるのは時間の問題の時」

「もう質問ばかりやめろよ……俺だって、戦闘は慣れていないんだぜ」

「あの巨大な花を倒したのに？」

「あれ、見てたのか？」

「うん」

「あの赤いビームも？」

「うん」

「そ、そうか」（気付かれて、ないよな……）

「あれは呪文なの？」

「そ、そうだよ？ よく、わかった、ね……」（言えない……魔法だなんて言えない……）

「さっきから言葉が途切れ途切れになっているけど、どうかしたの？」

「いや……なんでもない」

「そう？」

「うん。そう……ん？ ちょっと待て」

ラルズは胸を撫で下ろしながら、ククルを連れて、岩陰に隠れた。奥を見つめる……」

ククルは岩陰から顔を出してみると、奥には手に長い爪が生えた緑色の魔人が数匹いた。

……筋肉モリモリマツチヨマンである。

「あのモンスターは？」

「多分、コルトが言ってたアッパーネイルっていうモンスターだろう。見つかるのも時間の問題だな……ククル、さっきの質問の答えを言おう」

ラルズはポーチに手をつ込んだ。

「……答えは逃げるだ」

ラルズはポーチから埃玉を出し、アッパーネイルたちに投げつけ

た。アッパーネイルたちは慌てふためいている。

「今だ！ 奥に向かって走れ！！」

「う、うん！」

ククルがアッパーネイルを通り過ぎて行く。続いてラルズがアッパーネイルたちを通り過ぎようとすると、目の前に爪が飛び込んできた。

「なっ！？」

ラルズは咄嗟に頭を下げる。だが、腹に重い感触。

「ぐっ……！！」

それはアッパーネイルの足だった。ラルズは蹴り飛ばされ、先刻の岩に叩きつけられる。

「残念！ アッパーネイルたちからは逃げられない！」

「言ってる場合かあああああ！！」

ゴブリン千人抜き

ラルズは片膝に右手をつき、立ち上がりながら剣を抜いた。アツパーネイルたちは自慢の爪を大きく上げながら走ってくる。

「お前ら呼びじゃねえんだよ!!」

ラルズは左手を一人のアップパーネイルに向け緑の液体を生み出し相手にぶつけた。

「毒球！」

シューと音が鳴り、アッパーネイルは溶けていく。かなりグロテスクなのでこれ以上表現しないでおく。なにせ、ラルズが吐きそうなのだから。

— — — — —
)))))
 !

食事中に読んだ方には申し訳ないが、（いるわけないと思うが）吐いた。

「気持ちわり〜…うわっ、きたねっ！」

「何それ、魔法なの？」

ククルは興味心身にアレを見ている。

「ククル！近づいてはだめだ！」

ラルズは手を大きく両手を振ってククルを止める。アッパーネイ
ルもこの異臭に気付いたのかラルズから遠ざかる。

「あいつらもコレがいやなのか」

鼻をつまみながらラルズは鼻声で言う。

「ん？　じゃあ……二ヒツ」

ラルズはニタ／＼と笑みを浮かべた。その右手には……

アレが浮かんでいた。

「食らえ！ 名付けて酸球^{ゲロなげ}！！」

ラルズは大きく振りかぶってアッパーネイルにアレをぶつけた。
アッパーネイルたちは飛び上がって逃げてしまった。

「やっぱ魔法なんだね！ すごい！」

「いやいやいや。違うよ。魔法じゃないよ」

まだ勘違いしているククルをラルズは訂正しようと努力する。が、
いくら話してもククルは訂正しなかった。

「もうあんな技使わないほうがいいな……」

一方、シックルはケープ村の自宅で旅の準備をしていた。

「本当にこの村を出るのですか？」

忙しそうに手を動かすシックルの後ろで、村長が心配そうに言う。

「ああ。そうだ」

シックルはポーチに入れるべきものをすべて入れ、村長のほうへ
振り返った。

「絶対に……死なないくださいね」

「私はゴ布林千人抜きの名を持っているのだぞ？」

「だからこそです。その名を持っているからって調子に乗って無謀
なことしないでくださいね」

「わかってるよ」

シックルは壁に立てかけてあった鎌を肩にかけた。

「じゃあ、行ってきたま『ボタン！』……こんな時になんだ？」

ドアの開く音が聞こえ、シックルが玄関の方へ向ってみると、住
民の一人が両膝に手をつき、息も荒くなって立っていた。

「ゴ布林……でた……」

「何人ぐらいだ？」

「約……千匹かと……」

「千匹ですって！？ シックル、逃げましょうー！」

「いや、この名を試すのにちょうどいい。やってやるうじゃないか」
「なっ……！」

バツ！！

シックルは鎌に手をかけ、玄関を出た。

「ま、待ちなさいー！」

村長が行ったときにはもう遅かった。シックルは村の入り口に立ち、百メートル先にいるゴ布林達を睨みつけ、両手を左右に伸ばした。

両手に炎が現れる。

そして目を閉じ、ゴ布林達に両手を伸ばす。

両手の炎が混じり合い、火の円が広がっていく。

「
ファイアマックスショット
炎弾幕。」

シックルがそう呟いた瞬間、ビー玉ほどの大きさの火の弾が次々と約一億ほど飛びだした。

大量の弾はゴ布林に襲いかかる。それはまるで雨のようだ。だが、雨と違う点は打たれるとダメージを受けることだ。

ゴ布林達は持っていた棍棒で防御しようとするが、炎の弾は四方八方から攻めてくるので意味がない。

これはもう自分が勝ったとシックルは予測していたがそれはすぐ

に裏切られた。

水の膜がゴブリン達を包んでいる。炎の弾はそこに突撃していくが、儚く消えていった。

その呪文を唱えた者はゴブリンに似た体をしていたが、筋肉の付きが全く違う。そして、両手には青銅の剣が握られていた。

「変異種か……」

変異種とはその名の通り、モンスターが突然変異したものである。数こそ少ないものの、性格は元のモンスターよりも凶暴で知能も力も数倍に跳ね上がっている。とても危険な種類のモンスターだ。

炎の弾がすべて消えたとき、水の膜は破れ、そこらじゅうに水溜りができる。

変異ゴブリンの隣にいたゴブリンがシックルに向かって走ろうとすると、変異ゴブリンは剣をゴブリンに斬らないように抑えつけた。自分がシックルをやると言っているのだろうか。

ゴブリン達は数秒後、シックル達を避け、村へと向かっていく。
「させるか！！ 黒の光^{ダーク}！！」

シックルが唱えるが、呪文に集中している最中に氷の巨大な針がシックルに向かっていった。

「やばっ……！」

シックルは間一髪上体を右に反らし、針を避ける。前を向くと、変異ゴブリンが片手の剣をこちらに突きつけていた。剣の先でまた氷の針が作り出される。

「あいつからはどうやっても逃げれそうにないな……どうやって村を守ればいいんだ！！」

シックルがそう嘆いた時、その横をゴブリンが通り過ぎていく。

「しまったっ

」

ゴブリンが棍棒を振り回そうとすると、その頭に矢が生えていた。
「俺たちも戦うぞ!!」

後ろから男たちの雄たけびが聞こえてくる。振り向くとそこには短剣や農作業の時に使う道具を持った住民たちがいた。そして一番前に弓を持った村長。

「今回は私たちも一緒です。」

「……ありがとう」

シックルは再び変異ゴブリンのほうへ顔を向けた。

「さっさと終わらそう。仲間が待ってるんだからな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1338n/>

裏世界と剣と銃

2011年5月30日22時40分発行